858
70

国立国会図書館　タイトル『発句帳』　請求記号 858-70

ガラス使用

858-70

發句帳夏之部 上

題

更衣	丁一
餘花	二
新樹	三
若楓	四
卯花 英棟友	五
芥花	六
橘	七
郭公	八
夏草	九
夏月	十
牡丹	十一
杜若	十二
葵	十三
菖蒲	十四
早苗	十五
青梅	十六
五月雨	十七
梅雨	十八

帝國圖書館藏
国立国会図書館　タイトル『発句帳』　請求記号 858-70
ガラス使用

夏夜　十九

麦　千

夏夜

夏の夜ハ三日月にわれぬ心や夏夜

一日二日三日とみかしる往かな那

於仁和寺

夏来てや志つさ夜乃湖の波

眉則あやまりをこの人ハ夏夜　重仲

草の枕しらうやなり夜

夕まそていころのかへし夏夜色

紀巳進当るる夫一

恋の香乃涼しやうすき夏夜　生

夏夜たゝみにかへさ手十夢の春　以春

西国下向の時

海夜かさいよのへ千々千々船旅かな　宗春

うつれなみにはしめて夏木立かな　利貞

晴るゝて鳴の声や森乃夏かけ　昌孝

若葉まてハあらそふさまや夏木立　昌桂

すゝしさを立てとやすむ夏かけ

かくて住人の声れしたゝる夏　昌周

風をもうつ人のこゑや夏の月

若葉てハ葉よりもうつすし夏木立

木かけに雲やかゝるの夏かけ　昌海

夏雲を以ふ繁く

天人の衣やくつの花白かさね　昌逸

小雨して卯月朔日

夏山や卯月の雲の衣かな　重川

藤かゝる寺さへ見てもあふし　則云

夏もなほ山吹うつる衣や五月木立　昌作

餘花

ちる花の名残もをしく一木立　昌琢

花さへも世にわすれぬ深みの若葉かな　宗因

時鳥ちりのこるみよ庭桜　宗春

人ハ見ず花の残る立木立　昌孝

若葉とも春ならぬも庭桜　昌桂

春と立かへる桜や若葉

たつねて若葉にみるも初桜　昌周

花の春て花をさくすき山ざくら　重的

若葉にてもあをしの色香かな

夏山にみるや生さく初花　昌淳

若草はみる／＼年の若き立の庭　昌迭
立かけて立て山路や花かつら
白ひとて若葉かくしや宿一本　玄碩

新樹

涼しからぬ風とかへの葉の梢の秋　昌琢
花のみを恋さいさかさ　梢かな
志たる枝々のしらぬ花の衣
山の心雨にいつくもすゝけし葉の郷
山の月夏は庭の下草ミ立木立

志けりあひや世に似ぬ山の岩根松
花のみし木立ゆかしき茂り哉
志けりてきよ茂りをも又雨施法山
三浦長門守広下臣
葉くとかへのしかくすまゝや木々の色
言仍十七四
年経ても更に新たなかへの柴かな
わきて見ぬ世も若緑の茂りかな
若葉して白ひ庭の茂り　かな
梢さし迎や月の梢に夏木立
秋のうつる八重ふく木々の若葉
雨はらぬけや宿に迎ふ千木立
見しぬその庭あらぬ千木立

名もしらし高師の山か夏木立
草のはちわけて木々の葉かに
かくろへる家居や折の夏木立
夏よしと木々の若葉小暗の庭
夏山のぬるまさりけりふるさ池の下
籬垣根の茂りも近し木々は庭
年のうち清のゝや庭の夏木立
水のまの青葉や池の夏木立
むし雨の波しま側なる若葉に
得巴追合
志ら年に忘つゝ池に樹々の梢
そりしまる枝ならぬ夏木立
猶の色小堺はり家路の若葉に

見し花のいつりのちる若葉に
花清宗碧足院
木々の庭さつきものそれ若葉に
若葉とていろやいかに庭の松
採風と思ひ花ちれ若葉に
年を経て庭にとこの茂りに
かくみ山老もかけや夏木立
花の時枝ものこ若葉かな
若緑年乃ほとさきす茂りに
老木とふるのたすくる若葉に
緑なるより見えてわかゝの若葉に
英に換枝二老か旨を紀く
二千年の木もたゞ一本の志げり哉

昌俔
玄陳
昌程

ちる葉にも露ありし人もとの庭

所望ニ於宅

所用乃宿やかてぞ涼夏木立

みし秋の白ひもとけつゝ光なりけり　紹与

安親上京之行

眉ひらきて見ん山出し夏木立　昌陸

玉津島にて

島の名は山も何きよき花咲くは

人乃心若葉にあかぬ花の庭　宗周

夏衣たちは木末や落りしさき

夏の雨は海ハ夏さき秋染は

夏かくる木陰あるへし若葉かな

巡悼

春の花ハ志ぬるをみてそ秋の那　昌純

花の色も皆うつりきてのさかりハ秋

上総御出の時

月にはってかへ行山や夏木立　昌億

春秋のいつと若葉は木末に　能順

夏の山さそ落り紅葉木末に

秋らくとぬるや若葉の柏

山里に庭の竹は落ちるゝ子

帰年ても見し人ハ志たい宿の松

一周忌

若年みしや木のうちにありける松

ミち山本ハ雲のかゝ之は落りける

春枝ゆく人も又ありける若葉に　宗春

水上やわかの葉ゝとゝゝゝ立田川　昌栄

比叡の山にて
山ともみぢかさゝ紅あけて見栄に

辛僚かく
もみぢ(?)ハ義手の志ゝり一つ松　昌桂

根をたゝハあまとを来ぬる見秋の深に
春中年とて世ゝの見ゝとを水無瀬山

落りて年も根にかゝりて葉ゝの紋　昌周
わくて見ゝとを根にかゝりて宿のかゝへ

京居人先住宗寿かく
花のこちらにこる紅の深を那
雲とみし様ハつらら立十本立　昌海

あくとえ花のあとみる見葉るゝ
恋りけりもへとる秋の河春

婦礼り
下居ハ居らの見川よる千本立

枝かり渡の手かやとまかる代のあゝ
代をさしや丹縁のわゝ葉春雅中　昌逸

元婚
言葉さくけりやし婚乃葉りかな

日本武尊の旧跡より本宮に参るに
志るりを見ゝ得の宮生代ゝの塔

田村将軍千年忌
行ゝ年の大樹志るし千年に
花のこゝ庭の月さく夏千本立

国立国会図書館　タイトル『発句帳』　請求記号 858-70
ガラス使用

路清さゝわの葉に露の玉本かな
夏山の木々にうつる月夜かな
枝ゝとに露こそ宿れ若葉かな
夕暮し若葉の庵り谷の声
山水り涼しさわりすゝみかな
此方の根に清き波さき若葉かな
各木が山て若葉や楯の集つ山

昌寔

初瀬かな
今江小字尾上の松枝や夏木立
所まて月を染乃若葉の那
花の木も其かさいつも若葉かな
若葉の影見ても涼しさ若葉かな
みし若葉の雨数清ら夜若葉かな

雲頓

若葉葉の中や明け行く若柳

若楓
おい保振

夏と解る木風とく木や若楓
老の身もみすゝむや月かえて
影かけし露やとくの若かえて
木々の中よ夏知る色や若楓

昌瑶

雲仲

家のいろ軒しのぶいろいろ若かえて　宗因

まちたまちたやまたまたかえて

いろいは家先一いろふかみの楓　維順

枝のいろはもあつはかき若楓

染めとてすそに家かみの楓　宗春

いつよりのいろしきしきや若かえて

年の葉小庭やわきぬ若楓

貫之も紙若り

この字はふりきぬ世の若かえて　昌琢

好乃いろをみしや夫とも若楓　昌隠

林中や下葉あらふ青かえて　昌桂

茂みしは好けつしき若かえて　昌海

軒にむて家や秋かけし若かえて　昌逸

さゝ色に入門みえてみゆる若かえて　昌宣

この葉乃いろや和しは若かえて

名木もよ木立ふりても若かえて

色清しうるもしけの若かえて

山ふもとの中ゆもいろやわかかえて

緑そふ庭木のいろやわかかえて　重頼

祭花桃原

江戸山王祭之発句

新守の後世の世や日よし神祭　重仲

梅とかくみるもあはれな花なりけり　昌桂

さる清水山の春あり鶯ホトヽ　宗春

人はさむかれども花の駒

心を梅ゆるくやとや花人　昌海

是は丹州并津縁室

代々の春ときつゝもゆかしき花の室　昌逸

作け人たかあはれの二葉山　玄川

とりしめや花さかせる花　乎　玄碩

卯花

卯花もまたよしのきの生垣ハ　昌琢

卯花の下葉うとみを女ゝそよ

之ゝ垂る女初の花ハ根尾

ゝの花やたゆしのよハ花月

ゝの花やに縁も此卉色そよ

むかのはつや桜出てより桜ゝ卉

宮みの花もあ杯ハ雲の縁ゝ卉

宮みの花は桜ゝの風や雲ゝ庭

縁色二月忌

杉人そ女名もゝの花ハ宮ゝ杉　祥昌

卯花ハよの雪ならぬ桜かゝそ　昌程

卯花も宿めつしき桜かゝそ

卯花は雪打ち吹海のさゞなみ

白石にて

茨生の雲や此頃ふりし花の末

まうでさへとも卯花山と久かたり

卯花の香はいきとよしほとゝきす

卯花もふかし此月みよ久かたは

卯花は守かりぬ雲の山路かな

隠て揺猿やあみかさ此花の宿

うの花は垣くらし雪見る垣の宿

人の世やいまあるかりの花の宿

月見ふめて垣あり花の卯木

うの花乃宿は白菊の匂ひかな

うの花の波の水尾とや杉一本

宗因

昌純

昌信

能順

宗春

昌栄

昌桂

うの花こそ卯の花咲し紫居

卯花小名のみれぬ秋ともなし

卯花は空まで志るまよふ月夜かな

卯花や月と雲との友かりそめ

降雪の庭すみ清からや卯木原

一村あり見さ雲や卯の花木

月の行かりうの花に白き桃かな

うの花此花や雲に名のこ

又もとく雲みし庭の卯木垣

又の二日志 田中周安

あくる夜の月に絹や卯の木垣

うの花は雲乃水絹垣根かな

卯の花の雲すく空のひかりかな

昌周

昌海

昌逸

玄川

卯花の雪や水行かきね哉　昌室

卯花の色や吾月の夕哉

うの花はよるも昼の垣ね哉　玄俊

橘

橘のふかさしる所そ都哉

五月雨の一本ゆへつく風白ひけ

橘の香や袖よりいそし白ひけ程

橘の葉もかへぬ常盤の庭の松　昌縁

橘も宿は常盤の花のにほひ哉　昌程

橘や袖の香の立風かをし　昌陸
於九条殿下

橘の香や庭木ゆかしきみる五月哉　昌札

橘の香や折かへる袖の白ひけり　宗周

一本も香は花の林かな

むかしき名や君か代の香升

橘の中むつまじよい匂ひけり　宗春
新宅

橘の香はへあらし法の庭

植て家の年五月雨の立花の本かな　昌宗

橘とかつて子まつのきと郎　云　昌桂

土佐常覚家又遊亭

第の緑は月人々ゝや丹子むし哉　昌海
梅りむへも当ゐる折節か

梅ゝそ月にかゝものゝの林か哉
立る人由のいぬ王の宝か哉

云志ゝぬ哥の書やむへとこよ雨
丹子書や人八十の子の世月哉　玄仲
玄仍七回忌

梅そ云人のこゝ見かゝり少哉
安信基晴亭行

宿々人あへ云へかのくいりかな
花の書い莫ゝ梅の加ゑりゝる
梅い人形こめへつ　あき色香か哉

寿まそよし梅の香をさ夜衣　昌逸
宴ゝや古の名ゝ立花のくゝりに
梅やたゝ(ママ)くゝりは代に大風　昌室
相波に遊る季合業の中にて
雨そゆるむ月の花もと御か哉

国立国会図書館　タイトル『発句帳』　請求記号 858-70
ガラス使用

郭公

初声やいつか月夜山のほとゝぎす　昌琢

紹巴一周忌追悼之句

啼〃年啼声やむかし　時鳥

ほとゝぎす啼声や去年の袖の露

聞人わきしらる初音かな

従江大膳亮様上洛ニ供奉長好

杜宇聞人はとよ都郭

待わひつ声をまつや蜀魂

於巴所江戸（？）

音信も有やなきやの声や杜鵑

我宿の小車や入る年　郭公

里見安房守進上

足引の行水とらし下よ不如帰

杜宇我さら耳とりあらぬ声かは

世の人しるらむやそれや時鳥

於駿府

ほとゝぎす名乗るハ不二の高嶺かな

鳥の声八声あかれほとゝぎす

世にはうる声もかもの杜宇

名のりなきの生ハ浦ほとゝぎす

耳にきくや去年きゝならぬ子規

さつきの名を唱へ啼杜宇

去年よりや足ひき山のほとゝぎす

初音やりのはとするほとゝぎす

此宿を来るともはほとゝぎす

杏子ふれぬるや志ろてゐる郭公
廿き草の中をしるや子規
人傳の尾やここちほとときす
手安かりし声をともへほとときす
郭公世つをおもへは何声かな
於江戸
待てももへ山きくは保ととぎす
嵯峨や明ぬゆふ保ととぎす
杜鵑声中九重を初音かな
紀巳遠行のいとし
郭公志てむ余波やけさの月
古ゐかし
郭公なくく声をきの人袖乃露

香仲

日十三四
郭公もののしるを今日なく声かな
日十七四
思ひ出す声や千本の風の子規
声有る声をたるとき世に出よ子規
朱つ梅は吟
人傳の初声をまたれし郭公
ゆめやへ人家みて知らぬ郭公
香仍十七日忌
月やあらぬ月をまたる雨の郭公
人さらるる声やほとときす
子規うつすこころ木ゝの庭
郭公声のいつ方ある柴扉
心をよみし名月庭郭公

国立国会図書館　タイトル『発句帳』　請求記号 858-70
ガラス使用

保勒寺にて
世に住ハ持のあつさや不如帰
時於あまさ月雨笠に傳ふ声
周順始
郭公けふ書ハ風中も言葉かな
緑色遊左楊咲る所の内
大ホ川や橋のわりまやき郭公 云
あるし
郭公こすてを語らん人珠簾の外
明への世をふる也と遊し木隠の杜鵑
郭公こゑの川我為此を山の外し
古枝ふく
子規人に志らまぬ声の外
玄陣

山らつ出しけふ書ふ不如帰
まつの嶋ふしの残るし郭公 云
見えし過と此の笠此子規
旅をまつに住ら人ホ戸ほとゝきす
郭公もかのしをとその声の外
雲とるホ戸のやおりつけ傳ふ声
時鳥らくもかくまてを振の外 禅吉
子規ぬれ名志らし白笠士
涙のしら藤ねとや又ほとゝきす
庭にてあら人さ又あつと郭公 云
さらの車あ待まとうくも小郭公 云
待世にも芳さやまてまのと郭公 云
明行に東ある雲も此ほとゝきす
宗隆
昌福

忠度一周忌

きゝしかしきけハうき世の子規

年毎に空すハ山の山ほとゝきす

於行上人興行

一声の世に残しつすや郭公　云

稀の夜を秋ぬをしき杜宇

庭の香にさそひて待しもまつ子規

来もせぬ宿の郭公と思ふ竜もハ

去年を老て来るや去年の子規

青梅とも見ゆる世の中ほとゝきす

東本能寺居長行

時鳥や夜もすかてなけ子規

待もしきいつねハ秋あまし郭公　云

昌陸

宗因

一声に山まハ秋ぬほとゝきす

本阿弥興行

花の後時鳥たつね山路かな

花にあかぬ山路鳴しの郭公　云

行よりよるし山路行子規

世の名残ともの人日郭公　云

不二の峰にて

待なれぬ山とやし老郭公　云

夏の世とも一声郭公　云

宿に世や百年ほとゝきす

時鳥こゑハ都らし山かなし

待ハ夜も明るやほとゝきす

恋ひ人こそいつより待ほとゝきす

昌純

昌佐

追悼

法橋道頓書に

わすれめは浦やゆかりの郭公　昌琢

夏の月秋まつ事もすくな郭公

一声の力はたつよりも啼ぬ郭公　宗春

郭公は川瀬の音のならみの外に

声は出にかゝまつり顔遊よ郭公

声よかれと世をとはぬてふ子規

雨は夕の中すいかの郭公

此頃やまつも立丹も寄帰

北野松梅院禅昌興行

思ひ声やたのしとしても杜鵑　能順

郭公ことのつゝ木高し宿の松

時鳥なくしは猶しまち聞つるかなし

わかれてあけ卯月五月も子規

大方の雲井のゆかし郭公

夕月夜覚束なしや子規

聞まつ声さへはなまし杜宇

同覚え夜の枕うらし郭公

覚えとも此夜離を詠めて帰山

山寺にゆく

山家ても中すはいつち郭公

待うや峰の辺声を聞時鳥

なる許も聞くさかよ時鳥

子規なつとる手の雅の初音かな

声きぬや今の耳にも子規

紹巴百年忌

かゝる世をおもふに声も郭公 云　昌迪

限つきぬそらつよ里ゝ田長鳥　由紀

子規かり川ふなのりもる方もなし

百とせのこゑと年をと思ふる子規

宗長不待の一節如和声と名乞し　一笑

余亦并ふ宗祇するとて

紹巴の声をきゝてぞあけて子規　為村

紹巴の筆とや名の郭公 云　他阿

やよひ頃ふ世名のらぬや子規　紹甫

名やふ世にえんきらの杜鵑　昌琢

ふしこ松や空ふ残見のこ子規　昌程

子規もかし後世ふの声かな

嗚呼ゆくゆくぬ年月しる郭公 云

夜雲やたつるさちと待子規

きく秋と耳あらひけり杜鵑

一声に世人は帰る杜鵑

くもとおもてきく夜や雲時鳥

先此と呼けり盛る郭公 云

昌迪法眼一周忌

星あとのきゝとぞや時鳥　玄台

時鳥秋や先之待ちも住吉波　昌周

郭公きかんと思ふ声まで待ちもうる子規

人待や一夜中真空しも子規　信順

声亭きもかし世の声郭公 云

日南上人の許にて

かやうの翁さそへ一声ほとゝぎす

独吟千句の中に

時鳥まつハおのか頭の黒きかな

自同月にて

比ゆしの鳥も綿とへほとゝぎす

五月五日

人ひくやあやめも経にほとゝぎす

賀富緑に存やうの名に

ほつまとてもあやめの菖蒲時鳥

後我依来耳頻爰

やま人や耳に忘らぬほとゝぎす

一声ときゝのひとつ啼ほとゝぎす

昌湛

昌海

きゝかうりみやこあころや郭公

夜の雨や竹の陰声時鳥

山つとは一声ものにほとゝぎす

ゆふ川くまにくゝやほとゝぎす

かちゆきて又五月の玉に郭公

夜更ぬるてあくつるをとは一声

子規こひろかりし山清く夜

是ハ宗祇と両吟に

二声や海山うるほとゝぎす

花なくは都や初声ほとゝぎす

不陸法橋にありし時

雲井ゆくて名のるなの声し杜宇

老のそゝあはれつきやとる子規

昌迪

百夜をうけはへさゆけ郭公　云
名ものくハ我のよならん郭公　云
時鳥さへつ声のしやミ祢うろす
はつとりと待し夜差夜時鳥
　　画中郭公画賛所望
松花かしゆふ山の雨り郭公　云
まつさによるも啼時鳥
二声めとゆうや五月夜ほとゝきす
天ノ夜の穂ハ一こゑほとゝきす
西のこゝや月数る五十郭公　云
世ゝふ常ハちとしも初声時鳥
　　独吟五句の内
乱えぬかと人待夜ふ五月夜子規
　　　　　　　　　　　宗円

寝入あけよ空ハきちつきの郭公　云
夜きさき庭し入るかゆる郭公　云
山かゝりしくれしけほとゝきす
時鳥きつね夜はしら鐘の声
行かさを雲にかくして郭公　云
まちたけ月の行末のうきさきす
子の親ハ一声の夜中ゆかり子
ゆうけ細や吹けんしきさ子規
夢のまそかしに路やゆけ郭公　云
名ゆかこつ声をしほとゝきす
あさき行や新も藤の郭公　云
　　己前三月十三大原寺まて
寝し世を寝て戻ル中郭公　云
　　　　　　　　　　　昌宣
　　　　　　　　　　　宗碩

国立国会図書館　タイトル『発句帳』　請求記号 858-70
ガラス使用

夏艸

夏艸を結ひしは夜露もむかし哉　昌琢

三回忌

夏草の露に消えし人の名残哉

大津時雄出家

埋木も茂りてまたは小笠木

夏艸にもむすびあふよ継木哉

塚は尾上に残る庭に行人坂[illegible]夕まぐれ長行

夏草の露にもみだれ小笹風に

夏の月も草の花ひとめや艸の原

夏艸はからぶ人を茂りつつ

松にそふ夏野の草の風の声

茂りては狩人も恋しき夏野哉

昌程

昌陸

仍春

由紀

夏草を結ふに庵のはしめかな　宗因

夏の日りもしられぬ泉に涼し　維順

よけさりしつまと夏草夏木立

夏草のことしけき世の草夏結に　重仲

草の志けりや庵の柱も夏姥かな　昌柱

重仍讃旧

庵れ結世につむ庵ふ手向草

夏草の木末木末に山桜かな　昌周

久何庵主往於云讃旧

蓑まてもし庵の結ひぬ草の北庵　昌滿

夏深き竜に草の夏山かな　昌逸

臨終田中云枝新小く

志らぬ萩に草根かくやいくへ

庭草や萬よく庵つゝく夏の宿　昌寅

山草まく人を猶その志けりかな

結ふ庵の茂りもすゝし草の宿　重頼

八千の秋も只一つの夏姥かな

夏月

雑水とし手に月の朝かな　昌琢

明ぬ夜とく

夏の夜は月や汁のあかしの明石浦

右八首桜出合

恋しさハ月の中なる人の哉
常盤木の落葉の影や月の庭
袖に風ふりても涼し夜半の月

追て合

人の世もかゝれぬれ夏の月
名月ぞ世にうき人の種や夏の空
見ゆるのつき所さへなき夏の月
こゝろ浜ハあまりとこやいふ夏の月　玄仲

右被行

月は海舟の船涼しくる夏の海
試み形やあゆみ錦かの夏の月

紹巴一周忌

雑夜乃月ハことさら世の外朱かな　観芳
秋の夜や百夜はかはる夏の月　昌程
わきて見ん乙女もおなじ夏の月

清見がたく

夏の夜は月は清見が関の霜もなし　玄陣
月ぞ影や袖に落ちてつく夏の霜　昌程

右集室花徳長行

諸大夫

河舟や一字のあまや夏の月　昌陸
田蓑さへもとめて雲や夏の月
夢の世をゆめとうけ卯月かな　宗周
時鳥まつ月は清見が関もなし
夏は月みちかけ早き木の間かな　宗春

秋月手向く

涼めようとすもうけたてゝし洞の月　昧質

夏ハ山て月ハりもあし木ゆかろ子

夏の夜やあつさをきそ久月夜

わすれてハ行そらんや夕月白を

右日直光方清ア隠し降ル

おしめんや能きさ人の夜半の月　昌築

道白ま山ふゑく

月来し尽のとせま屋了夏の数　紹甫

数もアふえれよ卯月の神乃雨

不五年見ろを物や涼も夏の月

子のとうしかろく了

去ハ暮の世かも似すらぬ夏乃月　昌宗

見ろ猿も此の本きよそろ夏比月　昌桂

山あらハ山の端ふけよ夏の月

数ほとゝし桂や志ろ夏比月

咲しきや身中さ雲ふ方の月

みる数を知さ乃夜や夏比月　昌周

月清し浪路陰しま山中ハ

木もしやと松のうきすも月夜ハ

水無月のなる月なのし不二の雪

右都ま山の月伝ふ

夜明ふ見ろ夜ハ長し夏の月

皆夜の夜や月弓方の樹の陰

月見る隔見へそも世のきも郭しき

見る年もかならぬとま丘数の五月ハ　昌海

月や花時ぞつるなき川の底　　昌逸

追悼

魂きえて五月にもあかぬ袖の雨
空の底には様も月みな佐屋子
六年生の作より帰るなみの月
魂はかへる月や雲の空かなし

河内佐太の俳諧師を

魂鹿に雲とかくしる眉の月

筆意

象ハ古も流るてや明る空の月
月はくる魂やみぬ昔の空の月
魂清く風さそふを見る浪の月

有馬湯山にて　　昌寅

夏山の緑の月光出湯が峰
かりみ魂や月のまつしまや
夏の月明行けやうらハの杖
出て世にすましきまや夏の月　　季頓

杜丹

季頓十三回忌追善集

うつし世やあの山の家乃源氏
夜へやささ夜くし花の名取草　　昌塚

夏ふりてはくやちよの深見艸
春や夏なきさくらんの名九艸
数は宿ゑあるもいろや深見草
花さかりなむ日数ハそし廿日くさ
まどろみて花やいつもぞ深見草　玄仲
今日とはん又先咲もや深見艸
色よ香よおのはなのこれ名取草
捨て君も位よ花や深見艸
来しやまた一日こらへ廿日くさ
萬の香あまてらしや深見艸　玄陣
月の夜や雲に御のかつらくさ
安祥寺にて花見の時分ぬ上浣
姿あるやかはかはりと花も廿日艸　昌程

龍山御前にて牡丹をさして所望
いろふかみ千はなひらの花の廿日艸　宗因
手をふれておもしろし雲や廿日くさ
楊貴妃牡丹を好むの画賛やうきハふとさと
花やうきさくの花よ此香深見艸　昌紀
たつの花に似かとあかりくさ　昌程
東本願寺西室に利町の蓮上にて
色や先みさきと深のかつこ艸　昌桂
いろよ香よ本町にしれ名取くさ
花に心とりこめてや深見艸
今日もてまち見るまて待ふかさ艸
春秋にかはらぬはしる廿日くさ　昌周
あら野の餅よりはこその書本経ゑ五月
かけとはかりかはれ

若葉んいろのうすもいろや深見艸　　昌海

牡丹二句　寂休

世の中の花見や富乃名取くさ

同

もてあそぶ花の名高し深見艸

大名の若ゆ似乃花の千かへ清子

色よ香よ見はて出し深見艸

花に於て見る乙世や幾代名花王

宗様にて御くゐの一字を送り給ひしを悦て

咲やまさ移送るをはつる名取草　　昌逸

続貫

花に来て咲や水清深見艸

夜のかゆり出や葛のねのみくさ　　玉川

夢庵老人の還像に

初夏に語や大和の秋名取くさ

咲けるや世に香るもかな名取くさ

花にうみよりの心も深見艸　　昌宣

若の名やかへて惜むも大り艸

見る人の大かた留や色香深見艸　　玉頃

杜若

池水のかゝみや花の色よくさ

須明居に極りて

ありはらや名にはあの法かきつはた

一本のむらさきかとよかきつはた

花は葉や生て汀のかきつはた

散あへし見まくほしさの杜若

水を出て水より清しかきつはた

ゆかりは色こそや名のこし杜若

池のうけや下染とかきつはた

めてられてくや雨をとうかきつはた

生へ侘捨水にうつしてかきつはた

玄仲
宗因
宗春
能順
昌琢
昌郁
昌桂

おく手をもとかこへかきつはた

水すそてそきや浮きかきつはた

雨つくなよ降ぬる水のかきつはた

色よ花いつくる水のうつら哉

昌琢
昌逸
玄川
昌宣

葵

挿頭や以てぬくけのあふひ草

あふひ挿しあふ日は麻の葉あふ

かけて行遠祢の恵みあふひ哉

昌程
宗因
昌海

万代もあふひにかけて二葉かな　昌桂

葵草みなもとゝもにみつ葉かな　昌逸

かさしとはまよふひの露の玉かな　昌寅

氏人やかさしは葵の後かけら　玄俶

茂りあふ陰も二葉のあふひかな

菖蒲
五月二日

ひきすてし袖をいつとかかけりやあやめ草
尽　昌琢

根もしとき車によりも引あやめかな

五月雨にはやめもしらぬ沼の下

引て先見つゝさき根やはしあやめ草

板屋ふきにけ雨りる沼のあやめ哉

江戸承宅にて

はや先ほには江の名残に沼線かな　玄仲

あやめふくて

車よはやあやめ志らしの枕合は　宗因

枕ふや人の袖たちあやめ草

軒の雨露下もかゝしあやめかさ　宗春

朝めくさ露をもかゝさあやめかな

あやめ草の袖ひきさはすゞめかな

長きさ根を汀に来しきさあやめかな　能順

世の中は世々代々はすやあやめ草
枕ともしりや旅よけのはなあやめ草
菖蒲ふきのあやめ日に薫るかな
移りぬく花あやめの旅やむ軒の風
住吉にて
生茂るらん汀のあやめ久しかれ
人ならぬ中くやはなあやめの声君
明日をたのしみにあやめ草
袖ひちて川人ならのはなやめかな
猿もとれ一夜あやめをかり枕
枕にもふはなやめの花の紐を
かりゆしのあやめも草の月
春の門に夕ぐれのはなあやめかな

昌琢　昌程　昌周

昌海

昌徳　昌逸

千代のいろはまさに満つるあやめかな
あやめ草ゆる今しはいの代の根ざしかな
菖蒲草ふきて一夜ある月あやめかな
長さ根やみはいゆくあやめ草
中嶋寺本堂にて奉納
家の風かゆくるきのかくやはなやめ草
長き根をとりてはやまるの花あやめかな
玉水や行のはなやめ花の宿
門徒のそふつりも書漬さきはなやめかな
例しなき代々はる今日あやめかな

玄門

昌寔

玄碩

早苗

行末のなかみ桂とて早苗かな　昌琢

うへわたすみとりなる早苗かな

来む秋を下ル来しむ田頬かな

植しきて水の浅くみさなへ哉　春日立頼

祢宜かなりの国の田舞かな　稲荷社家吉田隆

雨よし田頬はしまるの里かな　昌程

口ころかへの時も乱らす早苗かな　宗因

雨ハ民の戸洗ふさみつる早苗かな

雨の声枕きよつるさなへかな

早苗をあらはす国の田頬かな

雨晴て川をいそる早苗かな　能順

水も月もうつる水のさなへかな

立登の雅風をさしさなへかな　宗春

兎ハ枝て尋るも来しむ早苗かな

里毎に雨の立ちる田頬かな　紹甫

さらやらへ里毎の升のさなへかな

明しや上中下乃むしろ早苗　昌桂

早春あるを桂母や小田の夜頬　昌瀬

ゐつ田ふしゝや汲手の玉さかへ　昌逸

植女なく人めなくさむ田植かな

豊なれ水かふりふりて田植かな　玄川

穂ふく宵玄川に贈

千代の種まく小田里分田植かな

まく水たのしさ種目耕かな　昌寔

ちよの数とるや都田の玉さかへ

うつくしさ海田水田にしみさかへ

雨晴て早苗ぬらす種かな　玄藤

青梅

天満宮奉納千句

青梅ぞ千年の種は一木かな　宗春

西翁法楽

折々の葉さへ実さへ青し都の梅　玄川

梅翁に法楽

青梅のこゝやあまたか林かな　玄藤

本ゝもよくなれる実義也都の梅　紀甫

国立国会図書館　タイトル『発句帳』 請求記号 858-70
ガラス使用

五月雨

迎来度清月波

雨雲も大内山や五月かな

天神名号宗

さゝて世にふる天の浪五月雨

雨ふかきみらくみさき五月雨

雨なかは年を行のて五月雨

五月雨はうき伊勢物の海士家

五月雨のふところやさむ紙屋川

五月雨は水うけ料のさかへ哉

ひきもあへて水行雨の五月かな

五月雨は空る雲の頭ふかき哉

五月雨は雲井紛ふかぬ都かな

昌琢

五月雨は旅しらずまよふ水出るかな

自房行夢宅

五月雨は沖なき川の浪さしふかな

五月雨は化なみすそぬ川瀬かな

五月雨の玉乃清さの打銅かな

五月雨はむくへし水や泉川

春藤花や早苗雨の五月かな

五月雨は舟や大江の岸辺波

五月雨は雲のわきも晴間かな

五月雨はそこ八人なかる会かな

五月雨の晴をとや夕の星月夜

五月雨はこや落津の池乃水

緑色一周忌

玄仲

五月雨の浮橋かゝる袖もなし　友益

松照光院法印辞

五月雨は昇の栖くさ沢の数かな　云

雨も世の庵を志ける五月雨かな

神の恵は常ならぬ世の五月かな　昌程

五月雨の晴ぬは五月にふる有けり　宗周

五月雨や出雲八重垣神の庭　昌信

五月雨は流のくゞむ海の岸下

五月雨や終にふるを神なりけり

五月雨もかさなる世を神の家　耐　昌純

さゞれ石も杉ても杉を緑の翠かな

昭石申く

五月雨の山のかほを浸けく入にけり　宗春

五月雨は志ばしやみての晴間かな　能順

雨雲を雨もさうなき空なり峯

汐雲のつゝのきや雨のさゝつき山　昌琢

五月雨や海深の空や根なし草　昌桂

五月雨やくもる里の外も一雲井　昌周

五月雨は東にも家の玉簾かな

五月雨は家にもはれず晴間かな

晴てより川もさゝなみの夕詠

五月雨や雲に埋木嶺の空　昌海

五月雨はさらに汀の里梅ある

五月雨は空もつゞし置れさし

五月雨の雲に科なし風かな

五月雨や木末も茂るかは木葉　昌逸

国立国会図書館　タイトル『発句帳』 請求記号 858-70　ガラス使用

一日二日さつき忘るる雨間かな　玄川
渕となり瀬となる雨の五月に　潦
舟岸へよする雨のさつきかな
五月雨にはれるも雨の恵かな　潦
五月雨みな泊やりんくる
五月雨色くたるまかし　梅の上
五月雨や浮しとたもとさつ漆の声　昌宣
きてもまた新しぬ雨の五月に　玄碩
雨晴て見ん手前ひとつの五月山
雲水のようとかれ雨のさつきたに

梅雨

五月風かわりたやまゐこり梅のあふれ　昌純
さかのへかれ木の下露や梅の雨　能須
冬ぶんとやまかわる風なき梅の雨　昌泰
たなひこ露そふ山ぬめくうや梅の雨　玄仲
冬来の又雨ゐも中のし梅の雨
花の色をはなつて雲なり梅の雨　昌桂
ゐ秋蜻蛉もいとはしの蔭梅の丘
憶くりし菊に末来ぬ梅のあめ　昌宣
梅の雨も行かぬ日数久日かな　玄碩

国立国会図書館　タイトル『発句帳』 請求記号 858-70
ガラス使用

夏夜

宵かけて待みじか夜の旅ねかな　昌琢

紹巴追善
星うつり影も又月待あけ無き一夜哉　昌程

追善
みじか夜は名のみ見えの別のまどひかな　他阿

大坂にて會
短夜や夜かへる夢をとゞまる世かな　宗因

夏の夜もみじかき夢の仮ねかな　玄陳

老の世もはかなや夏の夜のまどろまぬ夏　昌程

うかり世や実短夜ハ暮るゝまゝ　寛佐

我等侍従の湯治の時
短夜はとしもしも七のゆえにをかな　昌郁

短夜やかへるもよるの旅枕　昌逸

国立国会図書館　タイトル『発句帳』　請求記号 858-70

ガラス使用

麦

山畑や右左波よる麦のあき　昌海

うつりよりこし外しろき麦の秋　昌桂

色見て風に秋あり穂乃麦　重頼

発句帳夏部下

題

樗	百合草	照射 廉子	若竹	水雞	海松	末摘花	麻
一	三	五	七	九	十一	十三	十五
蝉	梔子	蒲	蛍	氷室	紫陽子	白雨	撫子
二	四	六	八	十	十二	十四	十六

樗

五月雨も樗乃風をかをりかな
花は人来ぬのに咲樗かな
えゝまて庭にや薫く雲の舟
猪川
昌琢

梅ゝ出てそふあふちの花の朳
天つ雲こまつの白き樗の花
色に出て花咲ゆかりの樗哉
雨晴て雲のかをりの樗かな
玄仲

茶代に樗の花はにほひけり
五月雨の雲まくもるゝ樗哉
本ここに見し花ちさい樗哉
樗にもとゝみぬ雲をかすみ樗かな
宗周
宗春

石竹 十七
常夏 十八
夕顔 十九
鵜川 廿
蚊遣火 廿一
雲峯 廿二
蓮 廿三
扇 廿四
納涼 廿五
泉 廿六
清水 廿七
夏祓 廿八
雑夏 廿九

をちこちは雲の根さしや櫻原　昌海

あふち咲花雲おろし尾上かなし　昌桂

風は遠し櫻はにほふ嶺のくま

西本願寺にて

花のひらくつやめくらみ櫻かけ　紹碩

櫻は背にかくしても雲のなかし　昌宣

筐乃這枝とし櫻かな　玄碩

蝉

紹巴追善

思ふ世のかゝるなかれて蝉の夢　昌琢

年〻に蝉の声たえし小萱原　宗因

木〻に風の吹くるきて蝉の声　宗春

蝉乃声小銭くふかちゝ木末僧は　能頌

うつせみの世をとはいりて何声は

空よ影は時雨ふりくる蝉のあと　昌俊

聞もとくやうつせみの世は蝉の活　紹甫

なつきこやさらに憐をみる夜の声　昌程

なくきりの濃るもの哉にく夜

うつゝの蝉は世をもえて来とは何声

空蝉の世の下半つきしみかな　昌桂

おもき身の一つ志たゝりや山路かな　呂園

鳴さしも夕日しつまる庵かな　呂洙

耳の外まても志らぬ蝉の声　呂逍

年々に蝉の声たつのきさ梢かな

滝川声あらく蝉のはしりかな　呂宣

志つまるや山里風に蝉のおと

巳歳二百四ヶ日

その葉や住よし中葉の蝉乃声　玄碩

立杉の茂り蝉の志つまりかな

百合草

庵の外見るも風や雨秋津ゆく空　呂琢

来しへて月も高や百合めくまて百合　玄仲

色の合て露もてたまる百合かな　呂程

あつまる日の添ゆくも露の時　呂海

打ちもありや花向し草の原　呂逍

雅ありや夏かけ枝へて花の露

是ふ花の打しらきさありけり　玄碩

梔子

はなし秋葉ハ志つまる姿に扉かな　玄仲

身を脱ては世にしられしの花ちらん　昌海

世経別荘にて

しられし所茶をふみけし梅の跡　昌逸

愚樹　庵子

雑守のむ庵の吉志めしとりけり　昌琢

雲の峰を庵々と出顔の大樹かな　昌叔

庵子は人雑守り茶のみ木樋かな　昌逸

文出の乙のりの釈とも大樹かな　昌宣

庵子より衣裏山の大呂もゆかし

とりしき洩庭や敷きつめ五月山　玄頓

菖

菖蒲かつらしあやめもさすや世の下　昌琢

花のりしかつら花ぬる軒の窓　玄頓

池のや深きさ川の春のりし

若竹

今年生の竹は筆葉の竹根に　昌琢

こま年生や竹の末にあるぬ世の陰

人の世を竹の竹の宝うけ

幾千代の生ほまりまく宿の竹

千世に千代の竹やさや千歳の松

あをひや若葉にて小笹の竹
若竹や節けハ寄の玉箒
若竹の千代をこえたる根さしかな
若竹や宿のかゝりのあふ代ゝ生
若竹の千代は八千代の含りかな
若竹や節ある若き玉の枝
若竹の生はなさきする節り哉

玄仲

能年のかしこまりけり
若竹のはこやの山やよゝのかけ

久世氏

今年生ふる八千世も経ん竹の行
宿の若竹のナつほよの色にかれ
陰呉竹や五月待経る宿の竹

昌程

若竹ハ世ゝの行末を見て生ほの枝

昌陸

竹の子や十日も白ひの若い竹
あふひとなりし若竹の節り哉
若竹の千代のもつ宿の松

宗周

千壽祝言

今年生や千代を旅する宿の竹

稲津氏

今年生や直なるを行く宿の竹

昌純

直くなる竹のこゝろを若葉かな

昌信

若竹の末も千年の五月哉

由純

初の竹や年ゝの色のはしめかな

宗春

若竹ハ直なるなくしき節の哉
若竹ハ初の初風の戯きかな

能頂

国立国会図書館　タイトル『発句帳』 請求記号 858-70
ガラス使用

なよ竹のうらも見ゆる若葉かな　紀甫

昔今われの葉さす世々と思へ竹　呂虎

竹の子も試みて実は世代の枝かな

塊をとうりけり折い　根笹　呂桂

若竹のすらくなりうと世の後かな

笋の根はうきさ出と思ふ了ゆかな　呂関

蓬生を出しあまより竹の若葉かな

呂蒼月紀行

竹の葉や此世さまに志乃ま屋の竹　呂海

今年生は祝よ竹のうちね竹見かな

庭居紀

今年生の子の代の体や子年芽かな　呂逸

若竹や今年生まく子代のうき　呂宣

若竹のあひくと世々のすゞしかな　呂頂

蛍

夏むすや草の根やくちて光蛍　呂緑

宮よりい連歌様で出京の人に

明りへくやいざさめて宮ゑに見よ蛍

若竹の蛍呼ぶ隠しの林かな

天非名号宮

年の瀬や佗々小宮入り見る蛍

於京見度

花蛍清ふかく涼しのたゝし出かゝる
夕風に月影さへて好む蛍の哉
出雲崎坂円今大長行
芦原の芦をふみ分け蛍かな
月をさく蛍ありけり夜面夜に
一二三ありさしみやかくれ見る蛍
伝色一風忌句
宿り行の足のありてゐ蛍
花火せ姫乃けりゝ風の軒かな
月ありて蛍やゆるゝ松の上
夕風のすゝしさ合ゆ軒かな
風に新緑行ていま行蛍哉

宗仲

蛍飛ふかきや薬のさうへさ屋を
吹落と吹風をとゆりての虫の哉
声を更て夕やこ岩を蛍の哉
わきかゝる玉藻ありけりかゝる蛍かな

昌顧

云かまハせて難波の蛍の哉
飛ぶみかくし汀篠すき蛍の哉
行蛍の跡かくし岩こえて夕篠
清水寺梅行長行
蛍を世日屋すけひかりの花蛍

昌陸

大坂池崎大長行
風に吹て消しかゝぬ夜や花蛍
吹落吹風に送りてく蛍の戸
月清し秋蛍と吹あふの庵

仍春
昌旡

花はてる宵さへと見えてましハ蛍哉　宗因
宇治にて
橋のはしを渡れる蛍かな
うつの雲うつまとふかな蛍かな
致思かく
蛍より松の葉すゑ絶えてやみに　宗春
夕暮に蛍はあらず蛍かな
蝶夢かく
あらしに涼しき本の蛍かな
長谷にて
玉つみし岸を汀の石なる蛍かな
雛あり峯をすゝむ蛍かな
影見えてまかりの蛍かな　能順

夕暮の草葉の末に蛍かな
夕暮のはてにや花の蛍かな
ほのみえて舟の蛍かな
河霧の夜に見る蛍の那
常盤川流れしあつめる蛍かな
川波の雲のうへの宿かる
花さく蛍をものさきに
夜蛍みしくれ玉の蛍
秋の蛍に月夜の蛍
緑月の蛍はしも蛍
草のよる宿を立つ蛍かな
夕風の蛍ていも蛍かる
涼風の影をもみ月蛍の那

昌迪
以心
保甫
昌孝
昌桂
昌周

鶯や池のほとりのやなきかける　昌海

色はみよりけり紅梅の花の花

庭をも待く梅が香に哀も花ゝる

長庚の室りて見る梅の花

追悼

春をまてとはりけたる梅に

浪寄ぬる昌宣云ふ

花の香に深ふつゝ玉あれし　昌茂

玉舞のひとつあり枝梅の花

正月晦日追悼

涼む江の飯代ゝ来て梅か花

冬にして風に津行香る

雲まに風ふく梅の月の緑の茶し

風によへ雨にの是行香にかな○し　雲川

かきみよとて梅もあくさ芦の○る

鶯とまて梅とろゝ小舞○る　昌宣

久留とも時香花の香○る

月ゝ来き庭よしと見る子梅に

高根の松とみる庭の梅の花　鴫山

国立国会図書館　タイトル『発句帳』　請求記号 858-70

ガラス使用

水雞

星蓮きさ川つまたゝく水鶏かな　昌琢

一夜二夜とくるまに眠し戸たゝくな

音信て夜戸出待ちくるかな

雑夜をもくゐまの声ぬ戸扉かな　玄仲

ところ波よ川門をたゝく水鶏かな

節季畑雲上河長行

月の夜は何をてたゝく水鶏かな　昌程

安秘上章長行

あかつきを振く水鶏や久月夜　昌桂

代宿も明門ありちのきは水鶏かな　昌陸

家入ても門先きたゝく水鶏のかし　宗因

月見人よそ戸はさしたる水鶏かな　宗春

行よし水千句

あかはるをとさゝ組田の水鶏かな　昌琢

月はさし水鶏は振く戸扉の外　昌海

あかつきの夕音信ても水鶏かな　昌逸

天の戸は明るわひしまよふ水鶏かな

底をなみ底にあふの戸は明くる水鶏かな　昌室

叩く戸は幾夜寝ずのくゐなかな　玄碩

氷室

星の月やひかりますくさむ氷室雪
涼しさを世にのこしけり氷室守
明日ハ世に山の名たて手氷室に
冬ふかミ氷りし涼しき風の氷
世にたてる名しるしの氷室雪
冬籠りけふも出る氷室の氷
汲にけり氷室や去年の松の雪
雪かけハ岩にさらし氷室守
山守さしむけハ広きものえらミそ
冬籠れる氷室の山やとほらけし

昌琢
玄仲
宗因
能順
昌周
昌滴
昌宣

海松

刈さして浦のけしきをとらぬめ八
手ふれつゝそて見へたハ涼しき磯菜かな
青海の色のみ松しのうちあめ八
名やから人魚の涼ぐる波の月
種しあるましや宮ぞりとつふ海松八
左りの沖に移涼ぐる青緑
かりて干す人あらハあるみる草八
青や見波のうきたる磯の床
種しあるところめぐする岩そうる
濱つれにさへ涼しき磯ぐとふめ八
見ぬ人刈や舟子水北涼緑

玄仲
昌琢
宗因
昌信
宗春
昌滴
昌桂
昌逸
昌宣

国立国会図書館　タイトル『発句帳』 請求記号 858-70
ガラス使用

紫陽草

あちさゐの色もうつろふ日数かな　昌琢

うちはらふや八重垣かこふ紫の庭　玄仲

度あまり草を染てやうつる連華の余ふ

紫陽草の花みし年もにほひけり　玄碩

末摘花

染なすや末つむ花かさし　昌琢

本つ葉を染よ末つむ花の露　玄仲

紅の母かともや末つむ花の袖　道作

紅はさそうつしや末つむ花盛　昌築

色にも末つむ花のあとめかな　玄碩

白雨

雨宿りして

雨のあとはらぬ夕立そ山かな　昌琢

夕立そすゝしき風の力かな　昌程

雨雲はけふの夕立の余波

雨のあと峰や嶺の雲かゝる　宗藤

越中より上京の人に遣す

夕立の名残やこゝもと青海　昌陸

夕立の神ハわき出る水かな　如心

夕立にぬれまてかはる土夜衣　宗固

夕立ハ月本出けり雲かゝりかな　維須

夕立や虫をあらふ空の月

夕立のかるく涼しき雲井かな

夕立ハたゝるを洗ふに池なるな　呂周

夕立の滝を新樹を上るなる　呂桂

夕立は此音やあつまの玉しハ　呂海

新樹にも夕立かけや松の風

夕立の後ハはしめの神もなし　呂逸

白雨の雲やうつ浮き波瀧の竜　呂宣

麻

こものつかれはてさ枝のふとる麻　呂桂

冬かれまいる色香をかまし様あさ　秀八

かいて見るハ谷集の呑や清く麻　秀頑

梅子

梅子ハ昔ハ菜清くいくかかかな　呂琢

あをしたハうきあさき宿の形見なる　秀仲

秋萬歳一つ宛

ここの葉や大和なでしこ花の種　宗因

撫子の生まかくしたり帯　和漢　能順

撫子や扇も風月とも架の内　昌程

なでしこと覚し殿月の袖の家

和漢

撫子やここ葉の光かな　大和　昌周

月

ここの葉の花やなでしこ屋大和　昌海

架かけてかさし撫子の床

なでしこや寝覚もやすき宿の家　昌逸

石竹

花よ柳の子の年あへ秋石の床　昌琢

常咲と行くと稲らく石の牀　玄仲

月影の影そふおりし石の竹

ものゝ名や世よ久しき石の床　昌程

若草や拾ひよりてかな石の床

常の時まさらかりや石の竹

夕影やいろいろなる石の竹　昌俔

稲しあすハ常ならみ年や石の床　宗恭

えびす見る仰や小川の石の床

種しあすハ咲や動る石の竹　宗因

国立国会図書館　タイトル『発句帳』　請求記号 858-70

ガラス使用

うちよるゝや一葉ふの竹　　鉄須
咲かしる庭ハ遠ふいしふ竹　　昌海
動きゝなき世や岩根松ふの竹　　昌室
春きゝあまる家了々葉下ふ乃竹　　玉須
風りしちる家々とやさしま花の竹

常夏

常夏と呼ぶ世を隠人花の庭　　昌琢
床夏や花の小雪乃葉かげ家　　玄仲
床夏も見ぬ世りや好しき葉の種　　宗春
身は浮草ちる人は
名残りのみ香はる床夏の家秋　　鉄須
咲つゝくやいつ常夏の花の庭　　玄俊
こ科か常なつしきゝ夢り那　　紹本
床夏ハ小雪ふて すゝしき花の家　　昌海
床夏ハ葉の夏つゝく胡蝶かな　　昌逸

常夏や夕ハ露乃ぬ過みしき　丢川

華をとつく世や常夏の花乃種

花ハなくてよ床夏の露中の露　昌宣

夕顔

新あ川きりと夕かほ咲りかな　丢仲

夕かほや夕々を待ぬ露の色

夕立の跡はかくまる露の戸　宗春

月ふし後夕かほ露の露

眉夕かり夕かほ白しまかへら　錦頂

夕かほハ何の花かそ雲月かな　昌海

夕かほや空月りのさて近隣　昌遊

夕顔の露をあつ戸の後庭ハ　昌宣

鵜川

小夜中とさそとほりの舟かな　昌海

文顔を探りて鵜川をよめる

宗かけ舟さ波に舞ふや波の文

波よの闇を漁に漕かり舟かな　丢頂

牧牛夫

牧ハてゝあつさ涼しき夜の宿　昌海

雲巓

華流の山なりぬ山や雲のみね
雨やみゆるゝ高ほ久ち立る雲の峯
山のゆるさ生しのなりてや雲の巓　昌程

山ハ皆ハ動きし出より雲の巓　昌通
空の海乃舟やあらし雲の峯　昌陸
今ハつハ久ゝ柴まくを雲の巓　宗周
もえの根を林にあらすや雲のこゝろ　宗春

追悼

見し出てぬりや顔の雲乃巓　昌本

侘しくして

浦ハよる華を織るくもの巓　昌桂
あとゝころやしるきとも立ぬ雲の峯
華の色を風の海にきて雲のこゝろ
不二の巓の林にあらす雲の巓　周旭

蓮

露に月そともし出す蓮の葉かな
あさき人の心とをしふはちすかな 昌琢
乗とをもみよ寒さの蓮の上
涼しさを清水露の蓮の葉かな
見えて入るも涼し蓮の花ぞ露 玄仲
ちらて葉のうへ池の蓮の葉かな
濁江にひらくすゝしき蓮かな 宗周
水底の影を蓮の下葉かな 宗春
白露を包みて玉にする蓮の葉かな 能順

水草の下そからぬはちすかな
あらまし世やさまくしき露蓮葉
追悼
亡魂やかなしと見よ蓮の糸 昌迪
ちりをもおしみ露の花の蓮
於浅草法厳法座の蓮を見て詠侍れい 昌寮
八ひらに法の葉も雨一味かな 昌桂
折はやといひて法池の蓮葉
水さひの池あさしとも蓮葉かな 昌海
白露は玉とも宿のはす葉かな
清く立て蓮の汀の荷の郁
水草にも花のこそ蓮の葉かな
世のちりかさに染ぬ色や蓮の上 昌逸

国立国会図書館　タイトル『発句帳』　請求記号 858-70
ガラス使用

水よりも清き泉や菊の花はちらす　昌宣

水かけもうつさき菊の葉の露かな

立涼さ種とやうさ菊の葉の露

扇

扇とはとらで手にゆるゝ団扇かな　昌琢

家の書もよみける袖の立扇の露　玄仲

月や雲風に別の立扇のうち

手つ空の月を握り立扇の露

追添様書讃

涼しさは絵かきし風のあふぎかな

宗祇法親筆

声さ風やあはれとし出る立扇の秋　西順

風の吹かしの書は秋の立扇の露　宗周

風は月の中よりいづる立扇の露

絵にかきし松本の風乃立扇の露　雅順

絵行の人に扇送るとて

あふぎは風がまだみる立扇の露　昌琢

月雲を見るつれなさむ立扇かな

便君に立扇の風ふきかりの露　昌周

とりどりあり風もみな何る立扇の露

涼しさつまき絵風かなる立扇のうち　昌海

扇まく涼み雲ある立扇のうち

飛かふ鵜も来て船に結ひてあふきかな　昌道

来る船に扇の風や座のかな

月も眠てのけふかあふきの跡　昌宣

袖木ちの鎌の手結ひて扇の跡

新涼も月の二千すのあふきかな　重頼

納涼

夏志らぬ月こそは志川なき人の跡　昌琢

出船の因光上落下向の時

都出ハ涼しき志ら月よ跡の跡

紹巴の長門

夏の日も綿の二たかせ雲ともかな

夏も無しよその神の山陰涼し

すゝしさを月よりも波出の跡

涼しさハ来ぬ秋に海の波の跡

雲あの手き扇の風や月草の庭

竹林や茎の日もらぬ下すゝし

いふハ渋木をもこの陰かな

紹巴宰相長門

ここちよう吹くのすゝしさも雲の風

船をまて流れの岸の涼

たへ波吹よる風も夏の宿

みなあさへ涼しきさ庭の木立かな
忘れしな夏川の一ト夕立かな
むすばれ合て出湯なすし谷の水
立すゞめさけ見の奥の昼のかけ

永庵幸坊

松の木の雨よりさそし　男鹿

雁風をうけてぬや楠の下すゞみ

金閣寺

世の中川や雁風うけぬ楼の上
涼しさをあつめすか池の山かな
すゞしさや袖つく波の庭さ門
涼風を袖のうちにや夕涼
涼しさの所ねを移る弥の松

大坂

たゞ海の風より涼し池のまへ
雲涼しすそより立ちし峯の嶽

亦三保

あつさ見や静うと涼の松乃波
月すゞ見人みも是行の下すゞし
涼さ出るゝ涼しみらの松の門
涼しさや山下水まで代の声
涼しさは風のかたる木陰哉

次白

緒巴一周忌千句

すゞしさは蓉の下行なかれけり

月

すゞしさは汲ら出水の余波かな

香雁

能岸

花の時の松藤をや結ん夕すゞし
みちまで蛸近き風の夕木
石のうへと夕すゞし志賀のから崎
すゞしさの又よるもなし松の風
木隠やあつしまぎれの玉柳
夏なりし虫の音雲なし夕かな
すゞしさも夜のくさあし直なれ
人生出て涼しきかとも寝さうな
夕涼みなみの細の白きつけな
風ぞかよふ山の音より下すゞし
涼しさも夜なりけり結ぶ城
宗わつし緑のかたすゞし海の松
声あつて雲の色もすゞし 五千鈴門

岩存
宗的
昌程

涼しさや船出して川瀬の波　昌陸
佐渡の國にて當国住人 長行
すゞしさや宮を彫出す河原風
涼しさは人の心をはしめかな
夏も世に寝られる頃の朝すゞし
松ありけやへすゞし風の夕涼
行ふりもとみかさんすゞし志賀の海　宗周
晴し雨や舟に松の門涼
今日月秋にしま涼し塩ぎ
あつさみしと見て寺で涼しの松
山の中で寝るすゞしさ行水かな
苗の柳も山の中川の下すゞし
夜のつかれ涼しさまさる宿の木　似春

舩近しそのうへ高し相手かな
すゝしさもとしぬや千代を宿の松
雑遊びや名にあふ夜の夕すゝみ　昌花
安永上京の比糺河原旅宿にて
風ゆかしすゝしさを加茂の川
涼しさに先登りして山井の音
夕ぐちの涼しさやあらしの夕涼　昌倍
栗おちてゆむしやはしの相手かな　宗春
夕ぐれの風や竹葉の夕涼
千代をへてこちや妻の下すゞみ　昌□
涼しさやせこを迎宿の竹
友ありて風の手紙と夕すゝみ　昌迪
涼しさを先に出し泉かな　紹甫

涼しさも行水先に鉢の水　仍球
みよし野の花にもまさる夕すゝみ　昌桂
緑荷に涼し隠家
おりふしの風すゝしかるの松の上
風の音ありしやかたの夕すゝみ
元升　辛中月夕涼倍西の拝みて長命水を
汲て
千代の其名を汲やつさゝに志ら川　昌周
玉盆の夕ぐれとすゝしさ扇かな
風かほる水涼しい若の時ちや子
風涼し松の葉ごしの夕月夜
朝夕の雨ふりて涼しさ水涼し
すゝしさやつの霧はや涼しき袖枕

昌迪法眼般若寺にやすらひ給ひしに

雲のみねきよき経や般若の風

昌琢

山松のかけすゝしさ久日かな

夏の月銭のこゑ成風もなし

風早宰相実種卿庭にて松を所望

常松のかけや庭ハ千代の影

涼しさや月より落る天つ風

清滝やいつもすゝしき夕かな

六十賀

声涼し千年に経る千代の松

昌逸

又涼あけはなやかに清水かな

水をせき風を入たる団かな

涼しさよ木陰ハ風をまつの声

すゝしさをわすれぬ夏もなし

是空山亭にて

その夏や涼しさの絵の玉の声

法橋小叙せられし時

涼しさや作らハかゝる松の露

玄川

宗清法橋遠望

秋よる風立波すゝし橋の原

去年

たゝみて宮ハかゝる風やかな

去年令井法橋宅社法楽

秋わきを科の風に吹もなし

兼寿宗居

秋も夜の露の声のみ秋の夕かな

すゞしさや風もとらへて庭の松　　昌宣

わたりかけ見合し木かげの下涼

夏座敷や時々わびしき門涼

くらき夜やとものまへにつけすゞし

　梅芳の松がえに作りたる人坐に

はしるのまがゝ松すゞし千代の声

涼風よみの葉に夏をわすれし

さる月やながめ梅の下すゞみ

　　　　石上にて

あまりすゞし月に雨さへ思根水

夜は山ありてすゞし志賀の葉しげり

風ふきてすゞしさも入江にて

薄夜さすゞさこそ夏をわすれし　　重頼

大かさの縁やいかに一類すゞみ

　仙台八條の深沢寺にて書れ

すゞしさは雨の後なり一本の家

泉

むすぶ手のまた夜秋くれし泉かな

涼しさは波より秋が泉かな

若人くむ汲みとるさゆつくるか

あつき日は生きかへる泉かな　　昌琢

国立国会図書館　　タイトル『発句帳』　請求記号 858-70

ガラス使用

右秋字之落長安喜作
東せねハ言葉の海はおりつゝしかれ
波よれハ心の月はおりつゝおきそ
右和二年於聖護院
月ハ雪松のあしあらはれつゝしかれ
波紬ハふくまにゆすらはれつゝうきそ
むらさきのまに松風すゝしき白水は
依居和尚書
法のあやかよははしらくむ白水うき
ふるまてさらの君ようにゆすら白水は
波紬ふちつ法の庭のはれつゝしは
ふみつひしまま衣くしもる白水は
青山撰拔喜作

玄仲
紹由
玄仲
昌程

一日の法はあやハ戸にとをりつゝしかれ
泉にも居ハしらむ夕かれ
世のふるまてふ紬ハ落の白水うき
すゝしはいのひろよろわりの白水は
玄葉須齋須千ふ
年毎にかたらぬ泉立のふかし
春のあやハ空にしてくむ泉は
紬よりもくをひく波白水うき
むらさき代はし水も見井は
聞比ハむしまかへしつゝうきそ
庭には谷のあやおふゆすら白水は
声ハ竹の中ふ十まし泉は
陸よふ月くらて月も白水うき

宗周
昌純
昌俊
紹山
宗春
柏所
昌迪
昌琢
昌桂

露のみてもとくさふりのみかな　昌俊

下風はいつも芳しき木々の庭　昌逸

三上山明神に奉

涼しさは千代乃声すむ泉かな
夏をも見ぬ夏なき庭の清水に
泉結ぶすしさや結ぶ玉の井かな
雲風もいつとはしらむ泉かな
今ぞらはしのゝめ冬はなし　昌宣

長享細川殿興行

ひとしほも夕のうき泉かな
松の下すむ年ふるいつもしれ
汲ほしくて汗ほして泉かな　玄頼

清水

秋風との清水汲ともすゝしく
山のうき涼しさ汲みし宮の清水に　昌琢

細川殿興行於細川亭にて

筆入も清水に結ぶ清水かな
涼しさを手にむすぶ月の清水に　玄仲

結ぶ名も結べば夏なし清水に
月なから結ぶ玉の井の清水かな
袖ひちて結ぶも惜し夏清水に　宗周

汲みて人の心をうつす清水かな　昌叱

行衛とのへを流して志み川かな　昌海

志清水を樽にもちて柳かな

茶の時をしむや清水も柳かな　重頼

夏祓

禊のくるかしや水屋御祓川　昌琢

重頼亭にて

さのつかし御行水や御祓川

夕立や千年立てし御祓川

長の秋と玉の緒いのちほとへうる子

浦人ハ玉藻や夕のはらへ一竹

於長州萩毛利山城守殿亭張行

波も今日千々の海へとこゑはらへ

夏のはらへうつろひこころ御祓川　重仲

一乗寺殿於御殿当座吟

人の世乃ちりすさし水や御祓川　昌程

今日波やくりて先つ夕はらへ　昌琢

かけし日数も今や御祓川　宗周

とりかはしの身して夏はらへ

八十翁

年波のうちよりて流れや御祓川　宗春

ちの輪くぐも誘ひや夢の跡　能順

国立国会図書館　タイトル『発句帳』 請求記号 858-70

ガラス使用

思ふ事ぬさにとりくの蛍かな

水鳥のかけきかよしこえさき川　呂柔

姫風や流るゝみねさ波蛍川　呂桂

麻の葉乃いてはよ人の蛍川

みこの姫一流にちらし蛍川　呂周

延年鏡ニ寿々尚白やしふ

年々のことく夕風すゝし蛍川　呂漁

採ゆ蛍へつすゝしはし草

一年の中をとふ丹ちの浦かな

川清も杜をとよせつゝ夕はへ　呂遊

守佐宗蛍奉ふ

行水の末から麻の蛍かな

行合の中つ流清し蛍川　言川

すゝしさは家の玉ぬくちの浦かな

蛍せしはその波や舟の来ル　呂宣

ふなや夕ゝ波の手中に蛍川

麻の葉もふもよる流や蛍川　言頂

ふもたに縁によふ瀬や蛍川

夏孫守佐宗蛍奉筆之ふ

夕はらへすゝしまや旅田への風

八幡山て一日立つ百寺社六月廿九

五十年立波や天へ竜の蛍川

雑夏

　浪千句にて　　　　昌琢

白妙をはらふて千波や夏の海

　連歌

夏も猶ら岸や此木の下涼

　ある所にて清書

夏の日やみな底千尋の影の松

しら浪の立ち寄るや[illegible]の下

岩ほこす[illegible]のたえの夏木

　於夏月題海

夏の日や山も出潮のたくへ

　扇之浮下長行

家のあかりてあすや緑の葉かり

夏はくや[illegible]笛の音あつき

うつせみの[illegible]や花の陰

夏川の玉藻は流るの[illegible]

あつき日は[illegible]の家

谷水や[illegible]の夏の雨

　[illegible]

雲の色も[illegible]月

　[illegible]

池水も[illegible]

波風も時[illegible]夏の海

武蔵野[illegible]

夏の日を[illegible]

　中宿下向大坂[illegible]にて

国立国会図書館　タイトル『発句帳』　請求記号 858-70
ガラス使用

流てきしゆやはかまき暑さ哉　玄仲
さゝえしやよせて返しつ樽の風
夏の日や所小舟は返る近山
小鷺の笑ふてに沈はる玉藻哉
蝉の声やも月は高し松の風
刈そつの青毛の駒は夏野哉
常盤木の落葉は影や月の庭　玄陳
時鳥鳴て雨その続や不二の雲
流たしよらや夏山ふしは雲
命経てもよしに逃る卯月哉
草ま池水ゆ南のきさゝ月うら　玄的
硯みか蛍並梅経之

夏みかハ紙絵御しらぬ人の景　昌程
手をて行月もよしや夏の空
大ぞの夏は日あかき雲は袖
紫ら経と夏をとくらまる海子哉
神行よ水も月ちりぬ涼世哉
夏来て上りうふりきゝ木陰哉
常盤木ハ策ヘて根よ落葉哉
桃山経てなやしへてまし雉　延
山深き木陰まて鮮や松の声　宗円
野川にて
水のかの色夏ありは色夏もなし
岩窟にて
秋や代まち由土つのこえし夏は去うら

隠居せしける時

志かる世を山科にかへつる茸哉

昌琢法印遷化の時

かくれにしいつまてもよとこそ秋の月やとし　　昌陸

照る月ハ光りまつはしる夜かな

鶯の跡とへ人ハ又来む夏も行かん

白妙の花も落葉の山や吹夕はえ山　　昌純

岸ハ水の緑とや茶清めの泉

灌仏の其仏の法水有縁の心を

春ふかくうつ仏すゝく法の水　　織田

書庭やかゝるうき庭の茶筅　　昌俊

夏衣きたりそれハ卯月の袖ほそ　　昌築

茶の湯をも花嵐や吹の夏の庵

雲水や夏のはしめの高野山　　宗春

濁る世ハ倦もかくし水もなし　　雑頁

かりの世の茶ほつる水仕は

久かたのあはつまての浦まて

追善

後まてる花の心や五月雨

母の祥月

心さし深きしや薬夏衣

加茂祭の社にて

花よりもあふひのかけや葵草

水清し写りて夏あかけ

袖ふりかけいつまて楢の葉風

影もさる志つくよりつらぬ五月雨　　紹甫

国立国会図書館　　タイトル『発句帳』 請求記号 858-70
ガラス使用

又まくは落ても涼し志賀の浦　昌宇

あつかりしと志らて涼しき高見かな　昌桂

若緑みも見し世かしの茂りかな

人の身に縁りつゝは若楓子

芦の葉に露ちりても別れや秋の声

若葉西賛

みじか夜のあしはちれつゝ若葉かな

脇句

飛路行日さへ涼しく暑さかな

昌連追善

出しほやはよめふるの五月雨も

池水のこゝろ夜ぬあつさかな

不二の雪みえる時志らぬ暑さかな　昌周

六月五日船遊にて

水も月のはつる小船や竹涼

夏もさともいさらの秋の涼葉かな

涼かつり水無月涼し若の家　昌海

さつ神やとかひをも見る茂の業かな

蛸の子は秋の涼みも志からかな

思ひつゝ船をふてもや夜の夜

追善

常無常を見し涼もうき涼かな　昌逸

手向くるこゝろさきて

別しは道さかれ夏無かな

追善

かくら若葉の船もさてちる數かな

国立国会図書館　タイトル『発句帳』 請求記号 858-70

ガラス使用

彦根にも常ならぬ風の落葉かな
　六平坂
松寺しぐれの松たてる波たとり
　懐古
白雪に茶屋や志賀も及ぶ浦
　涅槃の日西経寺にて
申すやたふとさ舟にて天下　去月
かへ人をとふ声まつみあふ舞の子
　耳として額を拾ひ
紙衣も袖の末の身にしむ朝かな　昌宣
　巴翁の旅のそ玄をおもひ人の命日に
かざさむもその筆荒き薄暮かな
　有馬にて

陰志めぬ上笠いで代る島居
芦の浮木のうへさ露や浮緑
代りを志て道よ七月のなかつら
なつりの顔つゆさき汀りけり　去顔
　白河関にて
彦根木の落葉に埋む茶碗かな
今日といひ人の思ひや埋む鏡　馬
　友来と以て額にて
うらはふしよりの袖の小幌かな
遠慮は草と名乗の細りけり
一反の家をも叩く風戸かな
　色葉にて
秋風も挨拶と陣の色なりけり

国立国会図書館　タイトル『発句帳』　請求記号 858-70
ガラス使用

858
70

国立国会図書館　タイトル『発句帳』　請求記号 858-70

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『発句帳』 請求記号 858-70
ガラス使用